
私と貴方の気持ち

藤井レイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と貴方の気持ち

【Nコード】

N6454Q

【作者名】

藤井レイナ

【あらすじ】

学校生活での恋愛。
同級生の恋愛ストーリー。
私の体験を少し入れた物語。

あの時の一時

私は中学2年のごく普通の女の子。
部活は剣道部。

私には唯一、仲良しな男子が一人いる。
その人は同じ部活で2年間同じクラスで幼稚園も小学校も同じ。

私はいつもその人にかかわれてる…
気分は決して良くないけど、なんかその人がいるだけで私は幸せだ
と思う。

これが『恋』なのかな…？

（重要人物）
私…新崎七海 しんざき ななみ

唯一、仲良しな男子… すぎたにかずたか 杉谷和隆

○一話目○

いつも通り学校に登校した。

私は、私の親友、ふじむら そら 藤村天といつも登校している。

二人で騒ぎながら歩いているとき、和隆が通りかかった。

和隆は私を見るなり

『よっ！お前は今日も元気やな』
たまには落ち込んで元気なさげに歩いてみるよ』
と言ってきた。

私は

『うつせーよ！

私が元気なかつたら「きもっ」とか言うくせに』
と言い返した。

和隆は

『バレたか！

じゃ

また教室でなっ』

と言つて走り去つていった。

その光景を見ていた天は

『いつ見ても七海と和隆くんは仲よしだねっ

…付き合つてるの??』

と嬉しそうに聞いてきた。

私は『そんなわけないじゃん！

和隆はただの友達だよっ

天までそうやって疑うの??』と言い返した。

天は『ゴメン、ゴメン。

冗談だよ。

あんなに仲良しな男友達がいる羨ましいなっと思つたからさ！

じゃ、また帰りにねっ』と言つて教室に入つていった。

私はもうついたんだと思ひながら自分の教室へと向かった。

クラスは天は4組、私と和隆は1組。

自分の気持ち

○2話目。

私は教室に入り自分の席に座った。

今の席の隣は和隆である。

席替えを何回しても絶対に和隆の隣になる。

隣になる確率が高すぎて

『お前は金魚フンみたいにならずと俺につきまとってくるな』と和隆に言われたことがある。

私は（好きで隣になってるわけじゃないし）と心の中で思っていた。

（そういえば今日って部活あるのかな？）と私が心の中で考えていたとき

和隆が『今日の部活来るよな？』と言ってきた。

私は（そうやって言うってことは部活あるんだ…。てか今日の部活一緒に行く人いねえ…）と思い『行くよ！』

あのさ、今日の部活、一緒に行かない？』と言った。

和隆は

『お前は友達おらんのかっ

寂しいやつぢやなあ

仕方ない。

一緒に行つてやろう！』

と私をからかうように言った。

私は『そんなに無理して行ってもらわなくても大丈夫です！』と少しキレ気味で言った。

和隆は『嘘やん！』

そんな怒んなやつ

一緒に行こうな！』と元気よく言ってくれた。

私は『ありがと。』と言った。

その直後、朝読の時間のチャイムがなった。

私と和隆はそのチャイムがなったのに気づき本を読み始めた。

本を読みながら私は（和隆も意外といいところあるんだ）と思っていた。

なぜか分からないけど朝読の時間はずっと和隆のことを考えていた。

朝読が終わり、急に和隆が私に向かって

『さっきの時間、俺のこと考えとった？？

顔にそう書いてあるで！

モテる男は辛いな』と言ってきた。

凶星だった私は

『…そんなわけないじゃん。』と隠すように言った。

けど和隆には隠せなかったみたい…

『もしかして凶星！？

とうとう七海も俺のこと好きになったか！』と言われてしまった。

私はなんか変な気持ちになってしまいそのまま固まってしまった。

そんな姿を見た和隆は

『…お前は分かりやすいなあ

そんなお前が俺は好きだけどなっ』と言ってきた。

私は思わず『はあ！？』と言ってしまった。

和隆は『…（笑）

冗談やんか、冗談。

七海は面白いやつだなっ

次、移動教室だから先に行ってるよ〜ん。』と言ったあとに笑って

今日を出ていった。

その笑った顔に私はドキツとした。

その時初めて
和隆に恋をしていることが分かりました。

貴方の気持ち

○ 3 話目 ○ ＊ 和隆目線 ＊

（なんだよさっきの七海の行動。本当に俺が好きみたいじゃん…。
…んなわけないか！）

などと考えながら俺は理科室へと向かった。

俺らのクラスはまだ理科室での授業は一回もしたことがなかったから、先生が

『今から席決めるぞ！』

男子からくじ引け！』と叫んだ。

俺は（また七海と隣になるんだろうな）と思った。
何故か少し（七海と隣にならないな）とも思った。

席が決まった。

俺は窓際の一番後ろ。

七海は廊下側の一番後ろ。

…隣にはなかった。

（七海が近くにいないと授業つまんねえ…）と俺は思いながら授業を受けていた。

授業が終わり、七海が俺のところに来て

『初めて席離れたねっ

寂しいでしょ??

まさか、さっきの授業中

私のこと考えてたりしてゝ』とからかうように俺に言った。

俺は

『んゝ。

考えてたし寂しかった。』と素直に答えた。

七海は『ホント??

私も寂しかった!

やっぱり私達はいつも一緒じゃないとねっ』と微笑みながら言った。

俺はその微笑みを見たときに俺は自分の気持ちに気づいた。

俺は七海が好き。

あの笑顔が好き。

七海の近くにいたい...

笑顔にしたい...

二人の気持ち

○3話目○*七海目線*

(…何この間。私、変なこと言っただけかな…??)

私は『何で黙るの??』と聞いた。

和隆は私の質問には答えず『俺、ずっと七海と一緒にいないとダメだな。』

と言い教室に帰って行った。

(どういう意味??私がいないとダメ??どういうこと??)

私は和隆の言葉を6限が終わるまでずっと考えこんでいた。

掃除も終わり、部活に行く時間になった。

私はなぜか和隆に声をかけることが出来なかった。

だから、あれから掃除が終わるまで私と和隆は一言も喋っていない。

(なんか気まずい…)

『部活行こ!!』

話しかけてくれたのは和隆だった。

『うん』と私は返事を返した。

『あの時の言葉。』

どういう意味??』と、私は思わず聞いてしまった。

和隆は黙り込んだ。

私はその雰囲気がヤバいと思い『ごめん。やっぱり何でも…』と言いかけたところ

和隆が言葉を被せてきた。

『俺さ、ホントに七海と一緒にいたいって思ったんだよね。』と言ってきた。

私は『どうして??』と返した。

和隆は『好きだから。』

『じゃなきゃそんなこと思わねえよ。』と強く言った。

私は黙り込んでしまった。

あげく、答える言葉が見つからず走って逃げてしまった。

(部活が終わるまでに返事返さなきゃ。私も好きって。)

こんなときにかぎって

部活の顧問の先生が私と和隆をペアにさせる。

普段仲が良いからと言って。

たまには場の空気ってのも読んでほしいものだ。

練習のペアなので喋る暇もないから少し私は安心した。

練習をしている時に見えた和隆の顔が落ち込んでいる様に見えた。

私は心の中でずっと（和隆、ごめん。）と繰り返し言っていた。

部活が終わり、私は返事を返すために和隆に

『今日一緒に帰れる??』と聞いた。

和隆は『おう』と答えてくれた。

帰りは、天と私と和隆の三人で盛り上がって帰った。

途中から天だけ方向が違うので

『バイバイ』と言って別れた。

そのあと、私と和隆との二人だけになり私は

『あのさ…』

私、和隆に言わないといけないことがあるんだ。』と言った。

感謝の気持ち

○最終話○

『私も、和隆のことが好きだよ。』

『…俺に遠慮して言っていないか？？』

『私、そんなことしないよ。』

『そっか』

こんな会話が続いた。

和隆の言葉のあと、私はなんて言葉を返していいのかが分からず黙ってしまった。

しかし、和隆が口を開いてくれた。

『ホントに俺のこと好きなの？？』

『…うん』

『じゃあさ、これからもずっと俺と一緒にいてくれる？？』

『…うん』

この言葉のあと、私は和隆に抱きしめられた。

この会話をしていたときは深刻そうな顔をしていたのに私を抱きしめたあとは、すごく嬉しそうな顔をして

『ありがとなっ

じゃ！

また明日な！』

と言った。

『じゃあね』

と返事を返し私はその場を去った。

少し歩き、和隆の方を振り向いた。

和隆はずっとこちらを見ていた。

私は深く深呼吸をし

『和隆、大好きっ！』

と叫んだ。

向こうから

『俺も』

という声が聞こえた。

この一時が私は一番幸せだった。

私は今も和隆が大好き。

そして

和隆も私を好きでいてくれる。

こんな幸せな日々を送っていくことの出来る私は本当に幸せ。

私を産んでくれた人

私にものごを教えてくださいました人

私に親切にしてくれた人

私を好きでいてくれる人

私に関わった全ての人に

私は感謝をしなきゃいけない。

私を産んでくれて、私をこんな性格にしてくれて、私に親切にして

くれて、私を好きでいてくれて…

本当に

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6454q/>

私と貴方の気持ち

2011年10月8日17時25分発行